

オオミズナギドリ繁殖地の分布図とバイオロギング手法を用いた研究調査地  
 ※オオミズナギドリ繁殖地分布図は岡(2004)の付録1の情報に元を作成

現在、バイオロギング手法を用いた調査がおこなわれているオオミズナギドリ繁殖地は、三貫島・船越大島(岩手県)、御蔵島(伊豆諸島)、粟島(新潟県)、冠島(京都府)、宇和島(山口県)、男女群島女島(長崎県)、仲の神島(南西諸島)である。そして、各繁殖地では北海道大学や東京大学大気海洋研究所をはじめ、山階鳥類研究所、名古屋大学、長岡技術科学大学、名城大学、福山大学、長崎大学、東海大学、冠島オオミズナギドリ研究会、国立極地研究所、東京農工大学などの教員や研究者、学生らが様々な調査に携わっている。

そこで、今回はオオミズナギドリ研究特集の第一弾として、まずは三貫島、船越大島、粟島のオオミズナギドリ繁殖地の様子と、各繁殖地で行われている研究内容について紹介する。

#### 引用文献

岡奈理子 (2004) オオミズナギドリ繁殖島と繁殖個体数規模、および海域、表層水温との関係。山階鳥類学雑誌 35: 164-188.

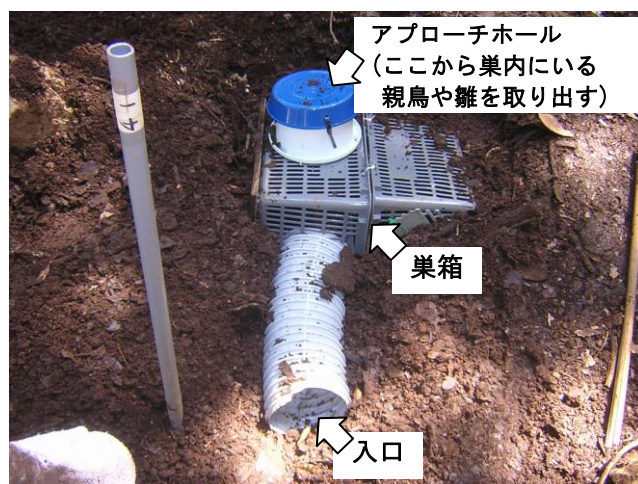
吉田直敏 (1981) 「樹に登る海鳥—奇鳥オオミズナギドリ(シリーズ日本の野生動物)」. 汐文社.

## 岩手県三貫島・船越大島におけるオオミズナギドリ調査

報告者 塩見 こずえ(東京大学大気海洋研究所・博士課程)

### 三貫島

岩手県釜石市の沿岸に位置する三貫島は周囲約 4km の無人島で、「三貫島オオミズナギドリおよびヒメクロウミツバメ繁殖地」として国の天然記念物に指定されている。三貫島までは最寄りの仮宿港から漁船で移動する。島までの移動時間は約 15 分で、海が荒れた日にはスプラッシュマウンテンのような状態になることもある。三貫島には約 10 万羽のオオミズナギドリが繁殖していると推定されている(松本ら, 2007)。本繁殖地では岩手県大槌町にある東京大学大気海洋研究所国際沿岸海洋研究センターが主体となり、2004 年から継続的に調査がおこなわれている。繁殖地には 70 個の人工巣箱(スーパーで使用する買い物かごを 2 つ繋げたもの)が埋設されており、その中で繁殖する個体を用いて繁殖モニタリングやデータロガーを用いた調査などをおこなっている。これまで加速度ロガーや GPS データロガー、ジオロケータ、衛星発信器などをオオミズナギドリに装着することにより、彼らの採餌行動や渡り行動に関して様々な知見が得られてきた(e.g. Yamamoto et al. 2008, 2010, Shiomi et al. 2010)。また、人工巣箱に自動録画装置を併設してオオミズナギドリの巣内での様子を撮影することで、雛への給餌などの行動観察もおこなっている。



オオミズナギドリ用の人工巣箱(埋設前)

島では岩場に調査ベースを設営し、海に面した岩場にテントを張って生活する。食事は主にレトルトのお米とカレーで、鍋に海水を汲んでコンロで温める。1 度に島に持参できる食糧と飲料水は限られており、また天候が悪い時には漁船が接岸できないため、島の滞在期間は通常 2 泊~3 泊である。調査期間中にはこのような短い滞在を何度も繰り返して調査する。



調査地風景(灰色のポールは人工巣箱が埋まっている位置を示す)



岩場に設営した基地。ここでごはんを食べたりお菓子を食べてり…



崖っぶちのテント場

### 引用文献

松本ら (2007) GIS3 次元表示を用いた岩手県三貫島オオミズナギドリ繁殖個体数の推定. 日本鳥学会誌 56:170-175.

Yamamoto et al. (2008) The lunar cycle affects at-sea behaviour in a pelagic seabird, the streaked shearwater, *Calonectris leucomelas*. *Animal Behaviour* 76:1647-1652.

Yamamoto et al. (2010) At-sea distribution and behavior of streaked shearwaters (*Calonectris leucomelas*) during the nonbreeding period. *Auk* 127:871-881.

Shiomi et al. (2010) Temporal tuning of homeward flights in seabirds. *Animal Behaviour* 83:355-359.

## 船越大島（別名：タブの大島）

岩手県山田町の沿岸にある船越大島は周囲約 2km の無人島で岩手県天然記念物に指定されている。船越大島は別名タブの大島とも呼ばれており、島にはタブノキというクスノキ科の常緑樹が密生している。島には最寄りの船越湾漁港から漁船で移動する(約 5 分)。タブの大島には船着場が作られており、調査ベースとなる廃墟までは道が続いている。しかし、昨年の震災により船着場は現在は壊れている。タブの大島は昭和 40 年代に観光地として開拓された歴史を持っており(現在では一般観光はおこなわれていない)、当時の売店の廃墟が調査時の私たちの寝床となっている。三貫島に比べて地面が平らに整地されており、屋根もあるので快適に滞在できる。しかし、1 度に島に持っていける食糧や飲料水はやはり限られているため、通常は島に 2 泊～3 泊して、宿舎に戻って準備をし、再度島に入るということを調査期間中には何度も繰り返す。

三貫島での調査に加え、新たな調査地として 2009 年からタブの大島での調査を開始した。タブの大島は三貫島から約 11 km 北に離れた場所に位置する。島では調査用にオオミズナギドリの巣(人工巣箱ではない)78 巣をポールでマークしており、現在 GPS データロガー、加速度ロガー、ビデオロガー、ジオロケータを用いて行動・生態調査が行われている。三貫島に比べてオオミズナギドリの個体数密度は低いが、調査ベースから調査をおこなう繁殖地までの距離が近い。そのため、データロガーを回収するために繁殖地を何度も見回る時や、成長モニタリングのために雛を頻繁に計測する時などには、傾斜のきつい三貫島よりも作業が楽である。



この中にテントを張って寝泊まりする調査ベース  
今にも崩れそうな建物だが、実際は意外と丈夫



調査地風景(三貫島に比べて下草が多い)  
緑のポールが調査巣穴の位置を示す



タブの大島にある売店の廃墟(調査時の寝床)  
一番素敵な角度から撮影



島から見える素敵な景色は野外調査の醍醐味